

宮澤賢治『グスコープドリの伝記』論

——永久の未完成、これ完成なり——

黒田 なつみ

—

宮澤賢治は生前「永久の未完成、これ完成なり」^①という言葉を残している。「農民芸術概論綱要」からこの言葉は大正十五年（一九二六年）六月頃に語られたと推測される。そして、この考えが反映されているのか、この後発表された童話はわずか三作品のみである。

その三作品のなかでも『グスコープドリの伝記』は賢治最晩年の作品であり、その内容から賢治の「伝記的小説」とよばれている。また、童話に限らず詩なども含めた賢治の作品に多く見られる、作品の書き直し、改稿を行っていたことが、『グスコンプドリの伝記』や『ペンネンネン・ネネムの伝記』などといった先駆形といえる作品があることから分かる。

発表されたということは、生前未発表のままの『銀河鉄道の夜』や『風の又三郎』などの他の童話と比較して、賢治の考えでは、この『グスコープドリの伝記』は「完成」した作品だったといえる。

賢治にとって童話における「完成」とは何だったのか。賢治の求めた「永久の未完成」とは何か。このことを、『グスコープドリの

伝記』において、この作品が賢治最晩年の作品であることや、作品が発表された形になるまでいくつかの変遷をたどったこと、発表したということをおぼろげに、作品のなかにある賢治の考えを読み取り、考察していきたい。

—

『グスコープドリの伝記』は、昭和七年三月十日に「児童文学」第二冊に発表された。挿絵は棟方志功。「児童文学」はこの号で廃刊した。

翌年の三月二〇日に「現代童話名作集」上巻・下巻が文教書院から発行、下巻に『グスコープドリの伝記』が収録されている。

この作品には、先駆形とされる『ペンネンネン・ネネムの伝記』、『グスコンプドリの伝記』などがある。「イーハトヴ物語」と分類され、賢治メモでは「少年小説」「長篇」の一つとなっている。

小学校や中学校の国語の教科書に「伝記的小説」として賢治のエピソードとともに何度も取り上げられている。一九九四年七月に東京テアトル株式会社の制作でアニメ映画化し、二〇一一年九月、文

化庁の「国際共同製作映画支援事業」により、株式会社手塚プロダクションの制作でアニメ映画化することが決定。監督杉井ギサブロー、キャラクター原案ますむらひろし。二〇一二年七月七日公開された。

三

賢治の童話には女性ほとんど登場しない。境忠一氏は「彼の童話作品を読むと、彼が女性を描き、女性を創造するタイプの詩人ではなかったことが分かる。極端にいえば、素朴な妹めいた少女をのぞいて、彼の童話作品には、女性らしい女性は描かれていないといえる。」²⁾と述べている。実際、主要な作品『銀河鉄道の夜』『風の又三郎』『注文の多い料理店』『よだかの星』などを含め、賢治の童話作品には大人の女性ほとんど登場しない。

その中で『グスコープドリの伝記』には、主要な登場人物としてブドリの妹・ネリがいる。ネリは登場したときこそ境氏の述べるような「素朴な妹めいた少女」だが、物語の後半では立派な女性に成長している。

この賢治作品の中では異例の存在といえる女性ネリはなぜ登場したのか。

賢治は三十七年の生涯を独身で通している。しかし、賢治の周囲には多くの女性がいたことが分かっている。賢治の妹・トシ、大晶ヤス子、伊藤チエ、高瀬露、木村四姉妹。賢治との関係性はそれぞれ異なるが、彼女たちは自分の意志で人生を選ぶことが出来なかったり、病気に苦しみ早世したりと、運命に翻弄された女性たちばかり

りだった。聡明で「新しい女性」として生きることを望み期待されながらも病にたおれたトシ。同じく才能を持ちながらも身体が弱く、望む道を進むことが出来なかった木村泉子。泉子の姉であるたまやひろ、ふきもまた、女学校卒業と同時に親の決めた縁談で結婚し、自分の望む道は歩くことが出来なかったという。澤口たまみ氏によると、賢治が花巻農学校で教鞭をとっていた時に相愛であったという大晶ヤス子は、賢治との結婚を望みながらも、周囲の反対にあい実現できず、別の男性と結婚した後渡米し、そのまま亡くなっている。伊藤チエは、昭和三年頃賢治と出会い、賢治に想いを寄せたのではないかと考えられているが、賢治が病に倒れたことで想いは届かなかった。高瀬露もまた賢治に想いを寄せたが、賢治にひたすら避けられ他の男性と結婚している。

ブドリの妹・ネリもまた運命に翻弄された女性である。幼い頃に両親を失い、人攫いによって兄とも引き離され、さらわれた先では牧場に放置されるという憂き目を見る。ネリの境遇は、かつて東北の農村で飢饉の時期に頻発した、誘拐され働き手として売られたという子どもたちの境遇と似ているという。そのような人生のなかでもネリは驚くほどたくましく生きていく。拾ってくれた牧場で懸命に働き、「なんでもできる」女性に成長した。そして幸せをつかんでもいる。「なんでも出来る」女性に成長したことで、拾われた牧場の一番上の息子（おそらくその牧場の跡継ぎ）と結婚し、さらに息子を授かるというネリの半生は、運命に翻弄されながらも、その努力の結果よいものになったと感じられる。また、ネリの語る「今年には肥料も降ったので、いつもなら厩肥を遠くの畑まで運び出さなければならず、大へん難儀したのを、近くのかぶらの畑へみんな入

れたし、遠くの玉蜀黍もよくできたので、家じゅうみんな悦んでい

る^③」という牧場の様子からも、豊かではないが決して貧しい生活ではないことが分かる。そのうえ、生き別れの兄との再会も果たし、両親の墓を知ることも出来た。

ここに、賢治の求める女性像があるのではないか。妹・トシとの関係やその早世から、「かくされた」妹が自分のもとに戻ってくることは、賢治にとって一番望むことであり、その気持ちやブドリの妹・ネリに表れていると考えられる。しかし、この異例ともいえる女性ネリがこの賢治晩年の作品に登場したことは、決して妹・トシという存在の影響のみではないと考える。賢治は多くの女性たちと出会い、その苦労を間近で見てきた。妹・トシの存在はその代表例といえるだろう。賢治が昭和七年（一九三二年）に「女性岩手」に発表した詩「母」を読むと、晩年に賢治が苦勞しながら生きていく女性に向けた感情を察することが出来る。

『母』 「文語詩稿 一百篇」

雪袴黒くうがちし うなるの子瓜食みくれば

風澄めるよもの山はに うづまや秋のしらくも

その身こそ瓜も欲りせん 齢弱き母にしあれば

手すさびに紅き萱穂を つみつどへ野をよぎるなれ

妹・トシの早世、失恋や想いを寄せられた経験、晩年妹のように接してきた木村姉妹の苦勞。それらを振り返るなかで、苦勞しながらもたくましく生きて幸せをつかんだ理想の女性像として、ネリを登場させたのである。

四

ここでは、賢治の晩年を昭和三年（一九二八年）の発病の時期からと設定して考える。

「羅須地人協会」の活動で疲勞困憊し、昭和三年の八月に賢治は両側肺浸潤で、その年の十二月には急性肺炎で、生死の境をさまよった。この病から完全に回復するまでに約三年かかり、本格的に活動を始めたのは昭和六年の春からである。昭和六年の四月から、工場主の鈴木東蔵に請われ、東北碎石工場の技師として働き始めた。東北碎石工場は経営状態が思わしくなく、賢治は技術面だけでなく、販売や経営にも関わるようになっていったという。そのため、昭和六年の九月、賢治は商品の売り込みに東京まで交渉に行くことになったのである。両親の不安は的中し、賢治は東京・駿河台の八幡館という宿で高熱を出して倒れ、遺書を書くほどの重体に陥った。父に命じられ知人の助けられながら花巻に帰郷したものの、その後ついに以前の健康を取り戻すことなく、昭和八年の九月二十一日に永眠した。法名は「釈亮祐」。国柱会より与えられた法諱は「真金院三不日賢善男子」。

晩年の六年間は、病に苦しんだ期間であった。しかし、健康に動くことが出来た時と変わらない情熱を、農業や創作活動に傾けていたと推測される。昭和三年の病から持ち直すと東北碎石工場の経営や肥料製造に力を注ぎ、また、亡くなる数日前の大変体調の悪いときでも、肥料のことで聞きたいことがあると農村の人が訪ねて来ると、「そのことなれば是非会わねばならないのだ。」^④と言って、家族が案じるのをよそに、体調を顧みずきちんと着替えて応対したと

いう。創作活動においては、病床ではそれまでに書いた童話や詩の推敲を重ねている。『風の又三郎』や『銀河鉄道の夜』などは推敲を繰り返して、未完成のまま残り、『セロ弾きのゴーシュ』は「手のとどくところにあつたそまつな紙に書かれていて、死ぬ少し前まで筆を入れていた」という。『北守将軍と三人兄弟の医者』『グスコープドリの伝記』が雑誌「児童文学」に発表されたのもこの期間である。また、昭和六年十一月三日、東京で死を覚悟した際に書かれたと推定される「雨ニモマケズ」は、未発表ながら現在賢治の代表作の一つになっている。

賢治の作品は『銀河鉄道の夜』をはじめ、生前は未発表のものが多く。未発表の作品のことを、賢治は父政次郎に対して「この原稿はわたくしの迷いの跡ですから、適当に処分してください^⑤」といい、母イチには「この童話は、ありがたいほとけさんの教えを、いっしょうけんめいに書いたものだんすじゃ。だから、いつかはきつと、みんなでよろこんで読むようになるんすじゃ。」^⑥と語ったという。また、亡くなる前日には、弟清六氏に「おれの原稿はみんなおまえにやるからもしどこかの本屋で出したいといつてきたら、どんな小さな本屋でもいいから出版させてくれ。こなければかまわないでくれ^⑦」とも言っている。最後まで迷いながら、それでも作品に込めた信念は忘れずに推敲を重ね、最後の最後で、弟に作品を託す。このことから、賢治が亡くなる直前まで創作活動に真摯に向き合っていたことを感じさせられる。

『グスコープドリの伝記』は、賢治の「自伝的小説」「伝記的小説」とよばれ、賢治の、このように生きたいという理想を描いた物語とも言われている。幾度となく生死の境をさまよい、自らの死と残さ

れた時間と向き合った経験が、賢治の農業にかける思いや創作活動に、最後にさらなる情熱を与えたのではないだろうか。

五

宮澤賢治は生前、次の作品を発表している。（ここでは童話のみを挙げる）

- ・ 朝に就ての童話的構図 「天才人」昭和八年三月二十五日
- ・ 狼森と笹森、盗森 「注文の多い料理店」大正十三年十二月
- ・ オツベルと象 「月曜」一月創刊号大正十五年一月
- ・ かしはばやし之夜 「注文の多い料理店」大正十三年十二月
- ・ 烏の北斗七星 「注文の多い料理店」大正十三年十二月
- ・ グスコープドリの伝記 「児童文学」第二冊 昭和七年三月十日
- ・ ざしき童子のはなし 「月曜」大正十五年二月
- ・ シグナルとシグナレス 「岩手毎日新聞」大正十二年五月十一日〜二十三日
- ・ 鹿踊りのはじまり 「注文の多い料理店」大正十三年十二月
- ・ 初期断章 「旅人のはなし」から「アザリア」第一号 大正六年七月一日
- ・ 「復活の前」「アザリア」第五号 大正七年二月二十日
- ・ 「峯や谷は」「アザリア」第六号 大正七年六月下旬
- ・ 水仙月の四日 「注文の多い料理店」大正十三年十二月
- ・ 注文の多い料理店 「注文の多い料理店」大正十三年十二月
- ・ 月夜のでんしんばしら 「注文の多い料理店」大正十三年十二月
- ・ どんぐりと山猫 「注文の多い料理店」大正十三年十二月

- ・寓話猫の事務所 「月曜」 大正十五年三月
- ・水河鼠の毛皮 「岩手毎日新聞」 大正十二年四月十五日
- ・北守將軍と三人兄弟の医者 「児童文学」 第一冊 昭和六年七月
- ・山男の四月 「注文の多い料理店」 大正十三年十二月
- ・やまなし 「岩手毎日新聞」 大正十二年四月八日
- ・雪渡り 「愛国婦人」 大正十年十二月、大正十一年一月

永久の「未完成」を「完成」というならば、生前に発表された作品はどのようにとらえるべきなのだろうか。

『農民芸術概論綱要』には、その最後に「畢竟ここには宮沢賢治一九二六年のその考があるのみである^⑧」とある。したがって、「永久の未完成、これ完成である」は大正十五年六月当時の賢治の考えだと推測することができる。この考えが反映されているのか、『農民芸術概論綱要』以後に発表された作品は二十二作品中三作品だけである。その三作品のなかで、「北守將軍と三人兄弟の医者」と『グスコブドリの伝記』の二作品は編集者佐藤 英に依頼されて「児童文学」に発表した。『朝に就ての童話的構図』については、賢治が森佐一に宛てた手紙で、「天才人」いたゞき、じつに、ぢくぢくと冷汗をながしました。どうも結局あなたに負けてしまひました。^⑨」と語っている。一旦撤回したものの「あなた（森佐一）」に負けて『朝に就ての童話的構図』が掲載されてしまった、というきさつが窺える。

「二」の解題で述べたように、「賢治メモ」にこの『グスコブドリの伝記』は「長篇」と書かれている。しかし、その他の作品『銀河鉄道の夜』などと比べると、長篇と呼べるほどの長さはなく、多

くの研究者がこの作品を「中篇小説」「中篇童話」と分類している。先駆形である『グスコブドリの伝記』と比較してもこの作品は三分の二の量しかない。発表作品にしては誤字や文字の抜けが多いのも気になる点である。

ここで、『グスコブドリの伝記』のなから、二つの部分に注目したい。

六

『グスコブドリの伝記』の最終章に不自然な点がある。数える最終章は九章目であるが、章題は「十、カルボナード島」となっている。このことに対して多くの人は「九章とするとこを間違えたのではないだろうか」という意見であり、現在出版されている全集や文庫などのほとんどは「九、カルボナード島」と訂正されていない。確かに物語の内容としては九章がないため不自然ということはない。また賢治は、先駆形『グスコブドリの伝記』においても、章題の数を間違えている。

しかし、この最終章は、つなげ方や章としての区切り方が他の章と違っている。他の章は次のようにその章につけられたタイトルに沿った場面を切り取っている。

「一、森」 森での幸せな生活から、飢饉によって家族を失うまで

「二、てぐす工場」 てぐす工場での労働とその終わりまで

「三、沼ばたけ」 沼ばたけでの労働とその終わりまで

「四、クーボー大博士」 クーボー大博士との出会い

「五、イーハトーブ火山局」 ペンネン老技師との出会いと火山局での生活

「六、サンムトリ火山」 サンムトリ火山での活動

「七、雲の海」 雲の上から肥料をまく

「八、秋」 収穫期、農民からの暴力とネリとの再会

しかし、この最終章にはいくつかの場面が詰め込まれている。

「十、カルボナード島」

・沼ばたけの主人を訪問

・ネリとの交流

・両親の墓の発見

・カルボナード島の爆発、ブドリりの最期

いくつかの場面が詰め込まれているという点では一章も似ているが、それでも舞台は「森」であり、タイトルの「森」に沿った内容に統一されている。しかし、この「十、カルボナード島」は、タイトルにそぐわない場面での内容がいくつもある。それまでの区切り方と統一させようとするならば、「十、カルボナード島」の内容は、ブドリりがカルボナード島の爆発を計画しそれを実行するまでになるはずである。また、前に挙げている「沼ばたけの主人を訪問」「ネリとの交流」「両親の墓の発見」は、先駆形『グスコンブドリりの伝記』にはなく、ただ「それから二年が過ぎました。」とだけあり、『グスコンブドリりの伝記』において、五年に期間を延ばしてつけ加えられた場面である。

このことから、十章には本来「カルボナード島の爆発、ブドリりの最期」という場面だけが用意されており、「ネリとの交流」「沼ばたけの主人との再会」「両親の墓の発見」という内容は実際には九章のものだったのではないだろうか、と考える。

それならばなぜ九章は存在しないのだろうか。また、なぜ『グスコンブドリりの伝記』には存在しなかった、この「ほんとうに楽しいもの」になった五年を十章の最初に加えたのか。

賢治は、九章を書かないことでブドリりの「幸せな五年間」を表そうとしたのではないだろうか。

この最終章に関しては、それまでの下書稿にはある赤・ブルーブックインクによる手入れがなく、下書稿形と発表形との中間段階を示す断片が残されている。三つの稿で最終章を比べると、章題は「八、次の寒さ。」↓「九、火山島」↓「十、カルボナード島」と変化している。【新】校本宮澤賢治全集を参考に、下書稿形を①、中間段階の断片稿を②、発表稿を③とすると、この「幸せな五年間」

に関する詳細な記述は、①②稿ではほとんど記述がなく、③の発表形でつけ加えられたものが多い。また、下書稿の赤・ブルーブックインクの手入れは、その様子から清書稿作成時のメモ的な手入れという見方が強い。そのメモ的な手入れがなく、別の草稿が存在しさらに清書が書かれていることから、賢治がこの最終章に対して他の章とは違うこだわりを持っていたのではないかと推測できる。そして、そのこだわりを持って、この「幸せな五年間」はつけ加えられたと考えられる。

①の「八、次の寒さ。」や②の「九、火山島」の段階では「幸せな五年間」を描くつもりはなかった。しかしブドリりの最期にこだ

わって改稿を重ねた結果、③の「十、カルボナード島」に変更する段階で、八章でブドリがネリと再会し、九章をあえて書かないことで、ブドリの「幸せな五年間」を表現しようと考えた。しかし、『グスコブドリの伝記』が童話であることやブドリの最期との関わりなどをふまえた結果、一つの章として書かなくても、「幸せな五年間」について触れていた方がいいと考え、十章の最初につけ加えるという形になった。下書稿からの改稿や本文を踏まえ、以上のように考える。

七

次に注目したい点は、ブドリの最期であるカルボナード島の爆発である。

火山を爆発させて気温を上げるという方法だが、土佐亨氏は「火山の大爆発は、実際には気温の上昇をもたらすどころか、上空に吹き上げられたダスト（火山灰）が日射を妨げて、気温を下降させ、冷害をさえもたらす危険があるというのが一般的な現象なのである。しかもこのことは、昭和の初めには気象学の常識となっていたのである。（中略）噴火による降灰は近辺の作物に被害をもたらすはずで、すでに植えつけられえいるオリザが「その秋はほぼ普通の作物になりました。」というのは常識では考えられないことだ。（中略）要するに賢治は、自然科学の通説や常識に逆行する設定をして作品をしめくくっているということである。^⑩」と述べている。賢治は生前「わたくしは詩人としては自信がありませんが、一個のサイエンティストとしては認めていただきます。」^⑪と述

べていることから、この「気象学の常識」について知っていたと考えられ、多くの人がこの矛盾を問題視している。

土佐氏は「ブドリ伝」は、「薬王菩薩本事品」の故事の、たぶん現代の・現実的雛案と言つてよからう。賢治は、ブドリに喜見菩薩を写しつ、自己の捨身の供養をも表象したのであつた。^⑫と論じているし、大塚常樹氏は「必要以上に、『法華経』への投企を読むのは誤りであろう。（中略）ブドリの殉死は、人々の幸福をねがう宗教が実際に科学の実証と結び付く、『明るい未来』への賢治の切なる願い、その文学的昇華だつたと言えよう。^⑬」と論じている。

火山を爆発させることで起こる結果を知識として知つていながら、この矛盾を残したまま『グスコブドリの伝記』を発表したのなぜだろうか。

多くの人が語る、宗教的な考えが関係していると考えられるが、それだけではなく、ここに賢治の思う「未完成」があるような気がしてならない。専門家ではない読者でも気がつくような矛盾を含んだまま発表することで、その矛盾が与える疑問によって、その読者が新たな物語をつくること、「永久の未完成」を求めたのではないだろうか。

八

『グスコブドリの伝記』は、「後半が急ぎすぎている^⑭」「描写がひきしまったというより、やや筋書的なせせこましい感じが強くなっているような気がする。^⑮」「幻想華麗で意味深長なプロット

に富む「銀河鉄道の夜」とは対照的な、より現実的で此岸的なこの童話は、もつとせいたくに書かれるべきであった。(中略)もし雑誌発表という機会がなく、また賢治が健康でさえあつたならば、この「グスコープドリの伝記」は、もつと望ましい私たちの大作に、そうして決定的な代表作になつていったかも知れない。¹⁶⁾と評価され、惜しまれている作品である。

前に述べた「九章の存在」や「自然科学的根拠の無視」などをふまえると、不完全なまま発表しているという印象をより強く受ける。賢治が宮沢清六氏の意見を聞きながら書き直しをしていたという証言があることから、賢治は読者を意識していて、そのような評価(不完全であるという評価)を受ける可能性があることは意識していたのではないかとということが窺える。

幾度も改稿を重ねた結果、多くの作品を発表しないまま逝つた賢治が、それでもこの形で『グスコープドリの伝記』を発表したのは、それによつて得られる「完成」が、作品としての完成だけではなかつたからではないだろうか。

賢治は生前「これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。」¹⁷⁾と「注文の多い料理店」の序文で述べ、母に「この童話は、ありがたいほとけさんの教えを、いっしょうけんめいに書いたものだんすじゃ。だから、いつかはきつと、みんなでよろこんで読むようになるんすじゃ。」¹⁸⁾と語つたという。

映画『グスコープドリの伝記』の監督を務め、以前、映画『銀河鉄道の夜』の監督も務めた杉井ギサブロー氏は「宮澤賢治という作

家の作品はいつの時代にも古びることなく、その時代への問題提起としての役割を果たしています。この『グスコープドリの伝記』という賢治晩年の作品もまた、私たちの現在という時代が直面している環境問題とも、ある種の重なりを感じるのです。そういう意味においても賢治の作品は、その時代その時代の人々にどう読み取るかを託しているとも言えそうです。¹⁹⁾と語っている。発表することでも多くの読者の目にふれ、その先につながることを賢治は求めたのではないだろうか。かつて、「童話体験」によつて物語の世界に引き込まれ、童話を書き始めた自身のように、賢治の作品を読んだ読者が次の物語をつくること。自身の作品として評価される「完成」だけではなく、次につながる限り続く「永久の未完成」を目指したのである。

ここでは『グスコープドリの伝記』について、完璧に論じられたとは言えない。私自身の変化で、この作品から受け取るものも変化していくと感ずるからだ。賢治の作品に限らず多くの文学作品に同じことが言えるだろう。しかし、内容やその不完全さ、また「童話」とされていることも含めると、この『グスコープドリの伝記』ほど強くそのように感じる作品を私は他に思いつかない。

境忠一氏は「魂の旅人宮澤賢治の文学はいつも問いかけ、結局は問いに終つている。絶対者になることのできない人間は、問うことしか許されないかのように、賢治は行動そのものであつた心象スケッチの現在形の中で、宇宙存在への限りない問いを続けている。²⁰⁾と述べている。大人に限らず、「童話」として子どもこの作品を読む。また、教科書に掲載されたり、二度もアニメ映画化されたりと、様々な形で繰り返しこの作品と向き合うことが出来る

ようになっていいる。私を含め多くの読者が、賢治がこの作品にこめた「問い」に対して、その時代、その時点での自分の「答え」を持って向き合う。賢治の求めたであろう「永久の未完成」であり「完成」した作品に、今この『グスコープドリの伝記』はなりつつあるのではないだろうか。

【引用文献】

- (1) 宮澤賢治『農民芸術概論要綱』成立年月日不明 推定大正十五年六月
- (2) 境忠一『評伝 宮澤賢治』昭和四十三年四月二十五日 桜楓社 三一四頁
- (3) ちくま日本文学「宮澤賢治」『グスコープドリの伝記』平成十九年十一月二十日 筑摩書房 四〇二頁
- (4) 宮沢清六「兄賢治の生涯」『兄のトランク』昭和六十二年九月二〇日 角川書店 二二三頁
- (5) 【新】校本宮澤賢治全集第十六巻 二〇〇一年二月一〇日 筑摩書房 五一九頁
- (6) 同(5)
- (7) 同(5)
- (8) 同(1)
- (9) 【新】校本宮澤賢治全集 第十五巻 平成七年十二月二十五日 筑摩書房 四四三頁
- (10) 土佐亨『グスコープドリの伝記』私見』二一九〜二四頁
- (11) 草野心平「賢治からもらった手紙」『歷程』昭和四十五年三

月

(12) 同(10)

(13) 大塚常樹『宮澤賢治 心象の宇宙論』平成四年七月二〇日 朝文社 三一九頁

(14) 宮沢清六「兄賢治の生涯」『兄のトランク』昭和六十二年九月二〇日 筑摩書房 二二六頁

(15) 入沢康夫『宮澤賢治 プリシオン海岸からの報告』平成三年七月二十五日 筑摩書房 七五頁

(16) 原子朗『宮澤賢治の人と作品』『鑑賞日本文学 宮澤賢治』昭和五十六年六月三〇日 角川書店 二〇〜二二頁

(17) 宮澤賢治『注文の多い料理店』大正十三年十二月 光原社

(18) 【新】校本宮澤賢治全集第十六巻 二〇〇一年二月一〇日 筑摩書房 二二三頁

(19) 映画.com「宮澤賢治の童話「グスコープドリの伝記」がアニメ映画化 来夏公開」<http://eiga.com/news/20111208/1/>

(20) 境忠一『宮澤賢治の愛』昭和五十三年三月三〇日 主婦の友社 一一三頁

【参考文献】

宮澤賢治『グスコープドリの伝記』昭和七年三月一〇日 「児童文学」

ちくま日本文学「宮澤賢治」『グスコープドリの伝記』平成十九年十一月二〇日 筑摩書房

宮澤賢治『農民芸術概論要綱』成立年月日不明 推定大正十五年六

月

宮沢清六「兄賢治の生涯」『鑑賞日本現代文学 宮澤賢治』昭和五十六年六月三〇日 角川書店

原子朗「宮沢賢治の人と作品」『鑑賞日本現代文学 宮澤賢治』昭和五十六年六月三〇日 角川書店

宮澤賢治「注文の多い料理店」大正十三年十二月 光原社

澤口たまみ「宮澤賢治 愛のうた」平成二十二年四月一日 盛岡出版
コミュニティー

森莊巳池「宮澤賢治と三人の女性」昭和二十四年一月 人文書房

【新】校本宮澤賢治全集十一卷 平成八年一月二十五日 筑摩書房

【新】校本宮澤賢治全集十二卷 平成七年十一月二十五日 筑摩書房

【新】校本宮澤賢治全集十二卷 付録 平成七年十一月二十五日 筑摩書房

【新】校本宮澤賢治全集十五卷 平成七年十二月二十五日 筑摩書房

【新】校本宮澤賢治全集十六卷 平成十三年二月一日 筑摩書房

佐藤隆房「宮沢賢治」昭和四十五年十月一日 富山房

境忠一「評伝 宮澤賢治」昭和四十三年四月二十五日 桜楓社

境忠一「宮沢賢治の愛」昭和五十三年三月三〇日 主婦の友社

西田良子「グスコープドリの伝記 賢治童話の〈解析〉悲願の結晶」
「国文学 解釈と教材の研究」二七卷三号 昭和五十七年二月 学燈社

入沢康夫「宮沢賢治 プリシオン海岸からの報告」平成三年七月二

十五日 筑摩書房

谷川徹三「宮澤賢治」昭和二十八年七月三〇日 要書房

土佐亨「グスコープドリの伝記」私見『作品論 宮澤賢治』昭和五十九年七月 双文社出版

大塚常樹「宮沢賢治・心象の宇宙論」平成四年七月二〇日 朝文社

植田信子「グスコープドリの伝記」試論―ブドリの「死」をめぐる―」名古屋女子大学紀要 第四一号 平成七年三月一日 名古屋女子大学

森莊巳池「宮澤賢治と三人の女性」昭和二十四年一月 人文書房

〔付記〕

本稿は、平成二十四年山口大学人文学部国語国文学会での口頭発表に加筆修正したものである。席上及び発表後に、諸先生方からご指導、ご意見を賜った。この場を借りて、深く感謝申し上げます。

(くるだ・なつみ)